

# 豚の多頭省力化の問題点

県普及教育県専技 多田昌男

## 1、豚肉価格の推移

37年1月の大阪市場における、豚枝肉1kg平均相場205円を最低とした豚肉価格は、37年末に303円に上昇、38年1年間の上物平均相場は366円となった。

反面年明けの39年1月から2月末にかけて、消費の減少、輸入肉放出に対する思惑等により急落の一途をたどり、3月に入って290～300円でやっと横ばい傾向を示し、4月上旬は弱もちあいであった。これは従来のような肉豚過剰生産による相場変動でなく、小売価格の高値による消費減が主因とみなされる。39年当初における識者の今年の豚肉相場の推移は、大阪市場で340円を前後するものと予想されていたが、これまでの相場からみると、今年は300～350円を中心に多少上下するものと予測される。

このような急落により、養豚の将来性にみきりをつけ、売急ぎをする浮動養豚家が一部に見られるようになったため、政府は売急ぎしないよう一般養豚家の自重を望んでいる。このような肉豚相場の変動による生産者の思惑が、従来の養豚業を浮沈させる結果となり、これでは安心した養豚業を営むことができない。物には価格変動がつきもので、これを上手に切りぬける経営技術こそ、これからの養豚経営のコツといえよう。

## 2、多頭飼育と収益性

農林省岡山統計調査事務所37年度農業収益調査では、岡山県の農業粗収益611億7,000万円の20.1%、119億3,200万円が畜産収益で占められているが、農家1戸当りの平均粗収益は農業専従者1戸1.8人、耕地1戸当り76.5aで36万円となっている。そうすると1人当りの年間粗収益は20万円、1日548円の労働生産性しかないことになる。

このような低収益では、安定した農業経営は望めないばかりでなく、出稼ぎあるいはその他から収入を得なければならない。しかし何時までも現在のような出稼ぎがあるとは限らない。安定した農業経営

を望むには、最低80～100万円の収益をあげなければならないが、養豚経営を取り入れる場合、次のようなことがいえる。

例えば、所得年間60～70万円を目標に豚飼育をすれば、常時かなりの肉豚を飼わなければならない。かりに月5万円、年60万円の所得をあげるには、肉豚1頭から2～3,000円の利益を得るとして、月17～25頭の肉豚出荷をしなければならない。このため常時成豚子豚を含めて100～160頭飼育しなければならない。農家にとっては大変な規模である。

これよりも、むしろ常時30～40頭飼育で、月5～7頭出荷し、粗収益約10万円、各月所得で1万5,000～1万6,000円の収入規模、つまり他部門との副合経営が農家向である。この場合、毎月10万円をあげるためには、枝肉1kg当り安定価格、関西下位価格240円とおさえて計算すると、前述のように常時30～40頭飼育が必要になる。これによって農業所得の3分の1程度を確保できれば養豚経営は安定する。

養豚経営における多頭化には限度があり、多頭化が進んだため、かえって収益性が少くなる場合が多いから、その農家に適合した頭数を決定しなければならない。100頭以上の飼育は、資金のほか、糞尿処理の問題があり、糞尿処理に金をかけては養豚は儲からないことになる。50頭以下の飼育と行くと、飼料はある程度自給ができ（飼料自給率30%以上が望ましい）、糞尿を畑に還元でき、資金が少なくてすみ、この程度が農家向きであり、他部門との副合経営が有利である。

## 3、省力多頭化と肉豚肥育の方向

繁殖用種母豚1頭当り年間所要経費は、第1表のように5万円程度を要し、肉豚1頭当り2,000円の所得を得るためには、第2表のようにかなりの経費を必要とする。

しかし、最近のように豚肉価格が安く、飼料費が割高の時期は、特に飼料の自給率をあげると共に、建物費、飼育労働費等の諸経費を節約し、資金、土

## 岡山畜産便り 1964.05

地、労力の3条件から、その農家に適合した多頭化を進め、省力化を図らなければならない。

最近放牧養豚といわれ、簡単なコロニー豚舎を作り、その周囲を電牧又は柵でかこい、肉豚を集団飼育する方式が取り入れられているが、この方法は、建物費が安く、敷葉が不要で、糞取りの必要がない。この場合、飼料の喰い込みの相違により、多少発育に不同を生じるが、肉豚であるため大きい豚から出荷されるので、それほど心配はいらない。しかし、群飼いのため雨期は不潔になり易いから、子豚導入にあたっては、豚コレラの侵入防止に留意し、運動場の排水は常に考慮する必要がある。

又適当な時期に他の区画に豚を移動し、イタリアンライグラス、ラジノクローバー等のその時期に合った、繊維質の少ない牧草類を播種して、青草として刈取、あるいは自然採食させると、飼料自給と運動場の更新ができる。この場合肥料の施肥は不要で、豚糞のみで充分成育する。又自給飼料利用による放牧形式の場合、1週間置きに運動場を移動させると、肉豚1頭当り2アールでは広すぎるという成績がでていいる。この方法は多くの土地を要するから、畑地帯以外には向かない。

肥育豚房が完備されている場合は、体重20kgから50kg程度まで、前記放飼場で群飼育した後、50kg以上から出荷時までを豚房で肥育すると、胴延びのよい、飼料効率の高い肉豚を生産することができる。しかしこの場合、多少飼育労力が多くかかることになるから、その農家の労力と設備によって、どちらの方法を選ぶか決定すべきである。

### 4、繁殖豚も放牧形式で

豚の繁殖は従来完備された豚房内でなければ、成果が上らないと考えられていたが、最近では完全豚房がなくても結構成績を上げている実例がだんだん増えて来ている。しかし、この場合、繁殖技術が優れていない養豚家は、むしろ従来の舎飼い方式が無難である。

繁殖母豚の放牧形式には2つの方法があるが、そ

(1表) 種母豚1頭当り年間所要経費

種母豚頭数	飼育労働費	直接諸材料費	飼料費			建物費
			購入	自給	計	
4.7頭	7,548円	1,074円	25,438円	4,474円	29,912円	1,307円
農具費	賃料料金	母豚償却費	地代	資本利子	計	
403円	2,778円	3,300円	388円	3,776円	50,486円	

注、中央畜産会「近代化推進研究資料」No.6。昭和36~37年調査事例6、種母豚28頭の平均数値を示す。

(第2表) 肉豚の標準原価計算 (昭和37年)

区分	肉豚販売価額	子豚代	飼料費	その他経費	所得
金額	円	円	円	円	円
	15,232	3,300	8,400	1,490	2,042
肉豚販売価額	枝肉単価 280円×54.4kg=15,232円 (芝浦過去6カ年平均282.5円, 生体95kg, 歩留64%)				
子豚代	過去3カ年の「子豚価額/肉豚価額」は肉豚生体10kgの1.84倍 (2.50~1.23)である。 (15,232円÷85kg×1.84×10=3,297.28円 ÷ 3,300円)				
飼料費	増体×飼料効率×飼料単価 (70kg×4.0×30円=8,400円)				
その他の経費	建物費296円, 賃料料金114円, 資本利子534円, 直接諸材料費412円 農具費103円, 地代32円, 計1,490円				

の1つは従来の方法に近いやり方で、分娩期を舎飼いし、離乳後は肉豚同様放飼し、寒さと雨を防ぐ程度の簡単なコロニー豚舎を設け群飼いする。10a当り8~10頭放飼できるが、朝夕2回飼料を与え、分娩予定日の10~15日前に分娩豚舎へ入れてやる。放飼場での飼料給与は、隔柵を設けて1頭ずつ喰えるように固定柵を作り、喰い終ってから扉を開放できるような方法が望ましい。

今一つの方法としては、コロニー豚舎のある放飼場で飼育する期間は同じであるが、分娩予定日10~15日前から1頭飼いのコロニー豚舎に移し、分娩予定1~2日前からコロニー舎内に設けた分娩柵内に母豚を入れ、分娩させる。分娩後一週間程度は、分娩柵をそのままにして運動を制限し、子豚の肢蹄が丈夫になってから分娩柵を取り除いてやる。母豚は最初のうちコロニー舎内に帰って授乳させるが、子豚が自由に舎外にでて遊ぶようになると、外で授乳する。

最近省力化により、分娩監視は昼間のみとし、夜間は行わず、哺乳監視も最初1日くらい行うのみで、従来のように数日間昼夜連続哺乳監視する方法は減ってきている。酪農試験場における昼間助産のみの成績では、育成率87%以上の成果をあげている。そ

岡山畜産便り 1964.05

の農家で労力が充分あれば、助産、哺乳を行った方が多少哺乳率をあげることができる。この場合、子豚の発育はやや劣るのが普通である。

5、飼料給与の改善を

放牧型式により建物費、労力、寝藁等の節減により、投下資本と労力、償却費の低減を図るとともに、飼料給与法の改善により、飼料効率をあげることが、これからの養豚経営安定のコツといえよう。

飼料の栄養価は、わが国ではDCP（可消化粗蛋白質）、TDN（可消化養分総量）の2本立で表現されるのが普通であるが、次のようなことがいえる。

- ① 高栄養飼料を持続給与すると、肉豚は短期間仕上となり飼育日数は短縮されるが、飼料費高、脂肪厚となる。
- ② 低栄養飼料を持続給与すると長期仕上、飼料費安、飼料増、脂肪薄となる。
- ③ 肥育前期低栄養、後期高栄養飼料を給与すると、後期に高い飼料を多く消費するため飼料費高となり、肥育前期の発育がおくれ勝ちとなる。

以上①②③の給与方法は不良給与方法である。

これら給与法に比べて肥育前期（体重 20～50 kg）高栄養、後期（体重 50～90 kg）低栄養、つまり前期DCP13.5%、TDN68%、後期DCP12%、TDN69%前後の含有率の飼料を給与すると、摂取量の少ない前期に価格の高い高栄養飼料、摂取量の多い後期

に安い飼料を摂取することになり豚生理上および経済的に有利である。

次に飼料の給与方法であるが、従来のようなドブ飼いは、肉質を損うばかりでなく、飼料効率を悪くするから絶対さけるべきである。生体 1 kg増体に要する飼料要求率及び体重 90 kg時の日令は、第 3 表のとおりであるが、ペレットが 1 番優れ、次いで粉餌給与となっている。ペレットは価格が粉餌よりやや高いから、効率及び価格の両面からみると粉餌給与が一般的である。

ランドレースに対する飼料給与量は、現在国の試験研究機関において調査中であるが、中ヨークシャーの給与量に対し、10～20%増が適量のようなのである。産肉検定用飼料では、前期（体重 20～50 kg）は 2 段増し、後期（体重 50～90 kg）は 3 段増の給与量が良いといわれる。

第 1 図は配合飼料を給与する場合の量を示すが、収益性をあげるためには、自給飼料を 30%以上活用することが望ましく、緑餌 1 kgは配合飼料 0.1 kg、いも類 1 kgは配合飼料 0.2 kgに相当する栄養分をもっているから、都市近郊にあつては残飯、残菜を、畑作地帯にあつては、飼料作物、牧草、いも類によって飼料費の節約を図るとよい。

6、肉豚の出何適期と飼料給与量

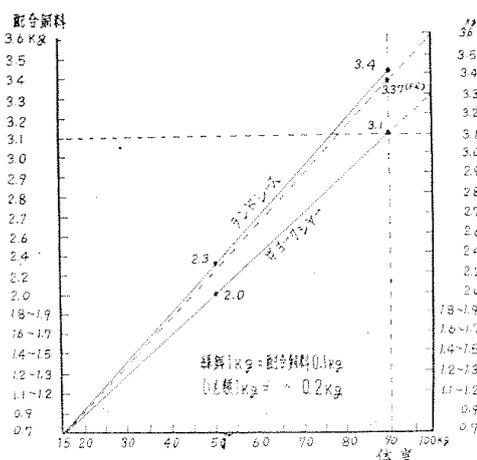
豚は体重 45 kg程度までに、頭、肢の骨が発育し、

(第 3 表) 給与形体による飼料要求率

区 分	粉 餌	ペレット	水ねり	湯ねり
飼料要求率	3.6	3.5	3.9	4.0
体重90Kg時日令	194日	187日	220日	214日

注、中ヨークシャー

(第 1 図) 肉豚の飼料給与量



(第 4 表) 体重20～90Kgの日令, 増体量

区 分	日 令			1日平均増体量			調査場所
	20Kg時	50Kg時	90Kg時	20～50Kg	50～90Kg	20～90Kg	
ランドレース	60	114	170	556g	714g	636g	酪試
1代雑種	54	107	164	566g	702g	636g	酪試
中ヨークシャー	82		214			535g	農林省

(第 5 表) 飼料消費量及び飼料要求率

区 分	飼 料 消 費 量			飼 料 要 求 率		
	前 期 (20～50Kg)	後 期 (50～90Kg)	全 期 (20～90Kg)	前 期	後 期	全 期
ランドレース	85.0 Kg	147.8 Kg	232.8 Kg	2.83	3.70	3.33
1代雑種	89.3 Kg	146.2 Kg	235.5 Kg	2.98	3.66	3.36
中ヨークシャー			260.0 Kg			3.70

#### 岡山畜産便り 1964.05

45～90 kgで体長が延び、筋肉が発達するが、90 kg以上では、体脂肪、体巾、深みができる時期であるから、飼料給与の改善と共に肉豚の出荷時期もおのずと決って来る。

飼料の給与方法、給与量によって多少の相違はあるが、中ヨークシャー、一代雑種等は、成熟につれ脂肪が厚くなるのを考慮して、背脂肪厚 3 cm以内の体重 85～90 kg時、ランドレースは早熟性と背脂肪が薄いことを考慮して、肉の熟度がある程度進んだ体重 100 kgに出荷するのが適期と考える。

農林省豚産肉検定所及び岡山県酪農試験場における試験成績では、肉豚の飼料摂取量及び飼料要求率は、第4表、第5表のとおり、国の示す改良増殖目標を上廻る、飼料要求率 3.5 以内である。

これらの成績から、今後の素豚としてランドレース及び同種と中ヨークシャーとの一代雑種が大いに活用されることであろう。